



Title	<書評>吉村典子著『ウィリアム・ド・モーガンと ヴィクトリアン・アート』
Author(s)	北村, 仁美
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 58-59
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67732">https://doi.org/10.18910/67732</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

吉村典子著

『ウィリアム・ド・モーガンとヴィクトリアン・アート』

淡交社, 2017年4月

北村仁美／東京国立近代美術館工芸館

19世紀後半ウィリアム・モリス周辺で活躍した芸術家として、英国デザイン史にその名を刻むウィリアム・ド・モーガン(1839～1917)。壺やタイルに描かれた幻想的な図案のデザイナーであり、またラスター彩技法の復興者、というイメージがまずは思い浮かぶ。しかし、ド・モーガンの出自や、手仕事に対する姿勢や考えについてなど、一步踏み込んだ考察はこれまでになされてこなかった。本書は、没後100年にあたる2017年を契機に、ド・モーガンの生涯と制作の流れを追いながら、その人物像と創造活動について明らかにしようという本邦初の試みである。

国内外を問わず、作家研究の醍醐味の一つは、人物についての洞察や作品の分析を歴史の中に立体的に立ち上げる過程で、細部に観察されるミクロの世界を、歴史の大きなうねりへと接続させることにあると感じる。いわゆる名作は、何百何千年と経てもなお人々を魅了し続け、ある種の超越的な存在になるが、作家も時代のなかに生きた一人の人間である。作品が生み出された時代や社会の刻印を受けている。時代や社会の制約のなかでいかに作家が創造をなし、そして作品がいかに時代を超えて生き続けるのかを明らかにする作業は、驚きと発見に満ちている。本書において著者の吉村氏は、「ヴィクトリアン・アート」という時代をその背後に広げ、ド・モーガンという人物と彼の制作を描き出す。では、「ヴィクトリアン・アート」とはいかなる時代のどんな「アート」だったのか。

ド・モーガンが、自身の道を歩み始めた1850年代、英国は「世界の工場」として未曾

有の発展を遂げつつあった。その一方、急速な工業化に警鐘を鳴らす人々もいた。ゴシック・リバイバルを牽引した建築家オーガスタス・ピュージンや、美術批評家ジョン・ラスキンらである。こうした活動に刺激された人々の間で、「表現においても、造形精神においても有機的にもものづくりがなされていたゴシック芸術を手本とする気運」(p.26)が醸成されていった。創造的な仕事を目指した人々は、絵画・彫刻・建築が一体となった領域に関心を向け始め、大芸術として絵画・彫刻・建築に置かれていた比重は、装飾芸術にも広がりつつあった。なかでもモリスは、「小芸術 the lesser arts」として軽視されていた家具や器、装身具等の装飾芸術を、「技巧的労働による産物としてだけではなく、作り手それぞれの創造的手段の産物としてアートの中にみようとし」、『「アートは労働における喜びの表現」』という言葉で、ラスキンの著作を通して理解、表明するようになる。やがてこの思想は、芸術の大小を問わず、「人間のあらゆる種類の表現が最高で最良のかたちで表れるこの上ないものとしてのアート」という理念を掲げるアーツ・アンド・クラフツ運動へと繋がっていく(pp.92-93)。

この潮流を著者は、単に、絵画・彫刻・建築から装飾芸術へと「アート」の範疇が拡大したと理解するのでは不十分で、「アート」自体が再解釈されたと捉える。初めは画家を志しながら、やがてモリス・マーシャル・フォークナー商会で、ステンド・グラス制作にたずさわり、その後タイル制作へ、陶芸へと移行しながらド・モーガンは、「装飾芸術

と絵画の両方に、活動を広げ」「その境界すら置かない思想をもって、広がり、突き抜け」(p.25)、新しい「アート」の実践者として、活動を展開していったのであった。本書では、その様子を四部(第一部:生い立ちから独立まで、第二部:工房での活動と造形表現、第三部:ド・モーガンを取りまく人々、第四部:ド・モーガンのタイルが使われた建築空間の紹介)に分けてたどっている。

ド・モーガンの活動は、1888年のアーツ・アンド・クラフツ展の開催に先んじ、運動が本格化するにあたって、一つの実際的なモデルを提供するものでもあった。ここに著者は「ヴィクトリアン・アート」とその具現者の一人であるド・モーガンをさらに掘り下げる手がかりを見いだす。それが第三部を中心に登場する「ロマンス」というキーワードである。

「ロマンス」とは、誤解されやすい言葉だが、「夢と冒険、あるいはそれをかきたてるような雰囲気や魅力のことであり、そのために考えをめぐらし、想像を逞しくすること」(p.97)と、この時代に即して著者は言い換える。「銜いもなく純粋に自らの理想でものをつくっていこうとする営み」を進めるド・モーガンの姿がここに重ね合わせられる。それは、同じくモリスやエドワード・バーン＝ジョーンズといった仲間たちにも共通する姿であった。

彼らは、アーサー王物語をはじめとする中世騎士物語を作品のモチーフの一つとして取り上げ、文字どおりロマンスに満ちた世界を構築したのだが、著者はこの言葉を、作品理解への糸口としてだけでなく、彼らのリアルな制作や生活にまつわるエピソードへと落とし込み、「ヴィクトリアン・アート」と「ロマンス」を重層的に関連づける。

「労働における喜びの表現」と再解釈され

た「アート」、それが立ち上がってくる場をさらに時代に即して具体的に想起するなら、目的を共にする仲間とともに労働に主体的に取り組むなかで、個々人にわき上がってくる想いや感動へとたどり着く。著者が「ロマンス」という言葉で把捉するのは、手を動かしものを作る人の、この心の動きや状態である。モリスをはじめとするド・モーガンを取りまく人々もつ、ものづくりにおけるこの「ロマンス」こそ、「ヴィクトリアン・アート」の原動力であったとして、著者はこの時代を特徴づける。

アーツ・アンド・クラフツ展示協会初代会長ウォルター・クレインが、当時の社会で失われたものとして、「美的な感覚、芸術的な感情」「想像的なデザイン力の喪失」とともに、「日々の労働への関心とロマンス」(p.97)を挙げる時、著者が指摘するように、この時代の「ロマンス」に、手によるものづくりに宿る夢や冒険、さらに言い換えるなら、手仕事にみる可能性、希望、探究心といった意味も盛り込まれよう。そして、それは取りまく環境や条件は異なれど、現代のものづくりにおいても、なくてはならないものである。

本書を通して「ヴィクトリアン・アート」が多層的に立ち上がり、読者は、ド・モーガンやその仲間たちの制作を、追体験するように読み進めることになる。巻末に附された工房印やスタッフ等の詳細情報は、作品のさらなる理解の手引きとなる。

〔( )内は、本書の引用頁を示す〕